

「魚屋から元気を発信したい」

有限会社金一・坪倉商店代表

坪倉良和さん

「秋田の旬のお野菜、いかがですか」。魚屋だといふのに、店先にはカボチャやサトイモ、シイタケ、ミズノコブ(山菜の一種)、リンゴ…。

ナードー坪倉さんは言う。

「自分たちの町や村を、都

会の人々にアピールしてもらおう。

全国どこも同じではつまらない。地方がそれぞれ光つてい

る。自分の理想とする日本に近づけるための取り組みで

す」

今後は特産品の販売だけでなく、郷土料理を振る舞つた

り、商店街の歩行者天国を使つて郷土芸能を披露した

り、といったことも視野に入れる。

る。

る。

行政の長でも政治家でもない坪倉さんだが、「地方の活性化」の重要性を熱く、真剣に語る。周囲からは「なぜ、

そんなことをやるのか?」と聞かれる。しかし、答えは至つてシンプルだ。「誰もやらないから、自分がやる。逆境に燃える性格だしね」

今は「かながわ朝市ネットワーク」副代表として、朝市を通じた地域活性化にも取り組む。県内各地の朝市が集結する「朝市サミット」をこれまでに2回、開催。昨年11月、平塚市で実施した際は3万人が訪れる盛況ぶり。「うねりは確実にある」と手応えをつかむ。

でもらう試みだ。

る。

1年。大学紹介のまつただ中で、授業のない間に、友人に紹介されて始めたアルバイト先が東京・築地市場の水産会社だった。そこで目にしたのは、ベテラン従業員が、ぐちゃぐちゃのタラコの「切れ子」をきれいに成形し、販売して

いる光景。商売の面白さを垣間見ると同時に、「うちでもやつたら売れるかも」と、祖父の会社を手伝うようになつた。

3年後、祖父の死去に伴い、坪倉商店の代表に就任する。

た。

る。

当時、会社の業績は悪化しつつあり、原因の一つとして、仕事のやり方に問題があると指摘したところ、翌日、ベテランの従業員2人が去つて

いた。

「それからが大変で…。自分で何ができると思つていいから、商品も買えない。仲間に頭を下げる商売のイロハ

を教えてもらい、仕入れから配達まで1人でこなした」

がむしゃらに働き、その後、坪倉商店は急成長を遂げた。その後、大きな失敗や挫折を味わうことになるが、「逆境に燃える性格」が、自らを支えた。

会社は急成長を遂げた。その後、大きな失敗や挫折を味わうことになるが、「逆境に燃える性格」が、自らを支えた。

がむしゃらに働き、その後、坪倉商店は急成長を遂げた。その後、大きな失敗や挫折を味わうことになるが、「逆境に燃える性格」が、自らを支えた。

リヤ。何代にもわたつて受け継がれている養豚農家やオリーブ農家が街中でおしゃれな店舗を営む様子に、大きな衝撃を受けた。

「一次産業者や小売店が誇りを持って暮らしていれば、町は豊かであり続ける」。このときの衝撃が、現在のまち、むらおこし活動につながった。

翻って、昨今の日本。「地方が疲弊している。しかし、ピンチはむしろチャンス」と坪倉さんは言いつける。

「いらっしゃい、いらっしゃい」。09年、大口通にオーブンした濱の市。「町の元気は魚屋から」の合い言葉通り、スタッフの威勢の良い声がいつも、商店街に響きわたる。

出店先の選択肢がいくつかある中で、あえて大口通を選んだのは、「昔のようなぎわいが薄れつつあったから」だ

という。

「魚屋の再生モデルと、町が変わったというストーリー」を自らの手で作りたい。60歳の坪倉さんの挑戦は、まだ続く。

ビジネス パーソン

秋田県美郷町産の野菜や果物約20種類が並んだ。店内には生産者の顔写真が掲示され、秋田県を紹介したパンフレットなども。美郷町の名が入った法被を着た販売員の呼び掛けに、地元の主婦らも足を止めていた。

横浜市神奈川区、大口通り

商店街にある「魚屋力エビ漁の市」。魚の販売だけ

でなく、魚を使った食事や酒類も提供する店の一角で、9月から隔月で、新しい企画が始まつた。

特産品の販売などをしたい全国の町や村に、店舗の一部スペースを無償提供する「タウンセール」。第1弾(9月19~21日)が美郷町で、第2弾(同23~25日)は旧津久井町(現・相模原市)だった。

本業は、横浜市中央卸売市場内にある水産仲

い坪倉さんだが、「地方の活性化」の重要性を熱く、真剣に語る。周囲からは「なぜ、

そんなことをやるのか?」と聞かれる。しかし、答えは至つてシンプルだ。「誰もやらないから、自分がやる。逆境に燃える性格だしね」

代表になつてからはしかし、決して順調ではなかつた。

再び、転機は訪れた。2004年、横浜市中央卸売市場の市場活性化委員会委員長に就任した。

全国の商品を一堂に集め、大手だった時代から、大きく変化。量販店などによる市場外流通が盛んになり、市場が活気を失いつつあった。全国どこも似たような状況で、関係者の1人として憂う事態だった。

目標は、市場の復権だ。市場内での朝市は法律の壁などもあり、実現できなかつたが、05年、同市場の有志らとと

もに横浜・日本丸パークで「濱の朝市」を開催。06年には、ポートサイド地区での楽しさ、市のにぎわいを五感で体験し

めた。対面販売や食の楽しさ、市のにぎわいを五感で体験し

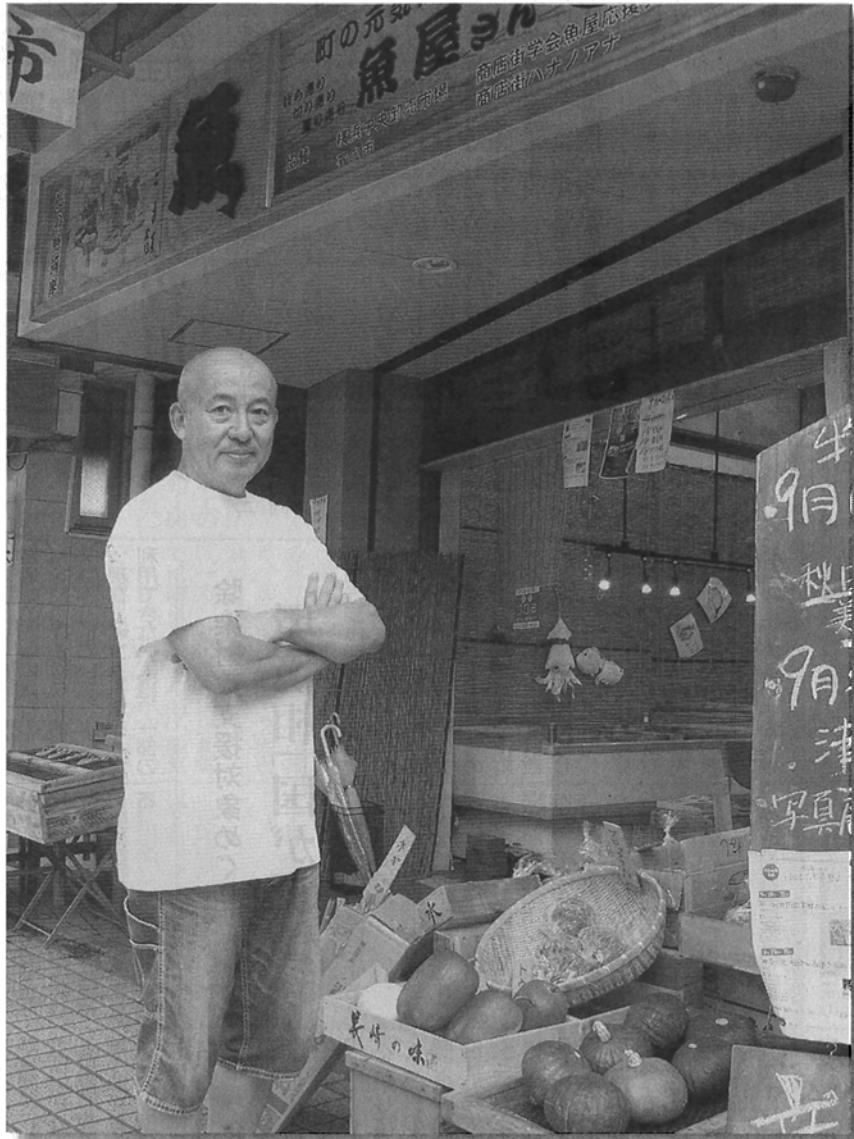
めた。

2011年生まれ。74年、祖父が始めた水産仲卸会社「有限会社金一・坪倉商店」代表に就任。09年、小売店を営むため「濱の市株式会社」を立ち上げた。横浜市神奈川区生まれ。

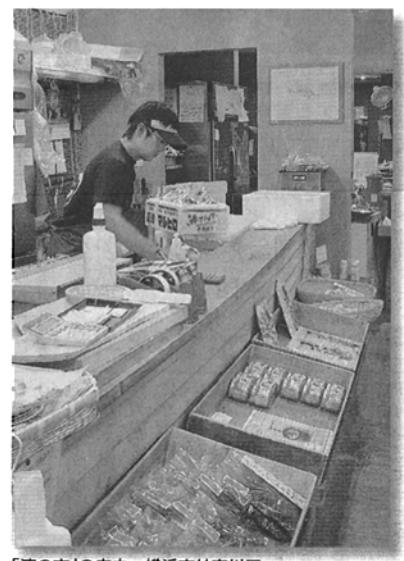
○ つぼくら・よしかず

1951年生まれ。74年、祖父が始めた水産仲卸会社「有限会社金一・坪倉商店」代表に就任。09年、小売店を営むため「濱の市株式会社」を立ち上げた。横浜市神奈川区生まれ。

(岡本晶子)



「魚屋力エビ漁の市」の前に立つ坪倉さん。第1回「タウンセール」では秋田県美郷町産の野菜がずらりと並んだ



「濱の市」の店内=横浜市神奈川区